不機嫌なのは誰のせい？

体験版

空手部次期主将の一斗。彼にはどうしても気になる過去の傷があった。敗北の記憶。その元凶がひとつ下の後輩として、空手部に入部してきた。気に入らない一斗。だが、気になる相手は違う意味で一斗を気にして・・・。
年下攻めのちょっとだけ過激な初々しいHをどうぞ！

■抜粋■
「先輩…寂しかった…」
「な…」
なんで、そんな言葉がでるんだよ…。一斗には理解できない。長い間、会うことも叶わなかった恋人同士じゃあるまいし。
「先輩、視線も合わせてくれないから…オレ…」
（そんな事ぐらいで、こいつ…）
情にほだされてしまう。いや、駄目だ。俺はコイツが嫌いなんだ。そう、一斗は自分に言い聞かせる。
ふいに、身体が裏返されて土屋と正面から向き合う形になる。
しっかりと抱きしめられたままだったが。
「ちょ…離せよ！ふざけんなっ馬鹿！！」
「前にも言いました。俺は”マジ”です」
「うっ…」
真剣な顔でもしてるのかと思えば、甘えた大きい犬みたいな目で見つめてくる。
（お前…そんな顔して、卑怯だぞ…）
あれほど憎らしいと思っていた、土屋の整った男らしい顔が、妙にかわいく思えて…。
一斗の胸は、苦しく甘く、締め付けられた。
「先輩…」
土屋の顔がゆっくりと近づいてきても、一斗は逃げなかった。
拒む事のできない、甘ったれの後輩。
唇が触れ、土屋の舌が一斗の口内に侵入してきても、一斗は拒絶しなかった。いや、出来なかった。
自分もそれを望んでいたのかもしれない…。一斗の脳裏のどこかに、そんな想いがあったのかもしれない。
土屋のキスに身を委ねる。
陶然と霞む自我。
心地よかった。

（俺、コイツのこと…好きなのかな？）
身をまかせつつも、未だ自分の気持ちがわからない。
土屋が離れていったとき、寂しさを憶えた。このまま、ずっとこうしていたい。
一斗はぼんやりと、憎かったはずの相手の顔を見つめる。
「俺は…お前のことなんて…」
心とは裏腹に、またそんな言葉が口をついてでていた。
先輩としてのプライド。男としてのモラル。そんなものが、一斗を頑なにさせている。
「俺は本気で先輩が好きです。どんなに嫌われていても、構わない。いつか振向かせたい。
俺だけのものにしたい…。いつか…」
切ない余韻を残して、土屋が部室を出て行った。
一斗はぼんやりと、長いすにこしかけた。
唇に残る、土屋の感触。
ほんのりと鼻の奥に残る、土屋の香り。
抱きしめられた、温もり。
（嫌じゃなかった…）
土屋の温もりをなぞるように、自分の身体を抱きしめた。
（いつか…そんなことがあるわけないだろう？）
否定できない切ない想いがこみあげる。
（好きになんて、なっちゃいけないんだ…）
土屋の一途な想い。真剣なのも、理解できる。だけど、常識が一斗を縛っていた。
（いつか…）
いつか、何ができるというのだろう…

++++++++++++++＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「で…何があったんですか？」
「…何って、別に」
一斗が後輩である土屋に問い詰められている。普段の一斗なら、そんな事は決して許さない。

でも、今夜の一斗は、気弱になっているのか、土屋に気おされていた。
「何もなくて、泣く人じゃないでしょう、先輩は。何があったんですか？」
最後のほうは、語気を荒げて問い詰める。
いやに迫力があった。
「いや…その…白浜先輩に、俺…やられそうに…」
「やったんですか？」
土屋は冷静だ。冷静でないのは、一斗の方。
「やっ…やってねぇよ！だいたい、お前がっ！」
「俺が…？」
そこで、一斗は気づいた。意地悪そうに、微笑む土屋に。
俺に言わせようとしてるんだ。
「いい、もうっ！…俺、帰るっ！」
そう言って、マットから飛び降りる。ドアに向かって歩き出す一斗を、土屋が背後から抱きすくめた。
「そんな泣き顔で、宿舎に戻るんですか？変に思われますよ」
「う…うるさいっ！」
もがいても、土屋の腕から逃れることができなかった。
「そんなに寂しかったんですか？俺にシカトされるのが…」
土屋が耳元で囁く。一斗の身体がビクンとはねた。さっき、白浜との未遂に終わった情交の名残が、一斗を敏感にさせていた。
耳をやんわりと噛みながら、土屋が低く笑う。
（そうだ、土屋はわかっていて俺をシカトしていたんだ。空手といっしょだ。こいつの戦法。
じんわりと相手を弱らせて、１本決める。汚い…やり方が汚い！）
「お前…ん…卑怯なヤツだな…」
快感に流されまいと、気丈に声を張る。だが、首筋に這わされる舌の感触に声が震えた。

抱きしめる手が、Ｔシャツの裾から滑り込み、胸のあたりを撫で回す。肝心なところをわざと外して。
「や…やだ…お前なんか…お前みたいな卑怯なヤツ…うぁっ…はっ…」
気持ちと身体がばらばらだった。拒絶したいのに、身体が勝手に反応する。
土屋の手が、ハーフパンツのなかに潜り込み、一斗の既に昂ぶったものを握る。
ゆるゆるとした愛撫。性急な追い上げでない分、余計につらい。
「んんっ…はぁっ…やめろ…あぁ…」
「ここは、やめろなんていってませんよ」
一斗のそこは、土屋の指摘する通りだった。先端から蜜があふれている。土屋の手の動きに合わせ、くちゅくちゅと淫猥な音をたてる。
「やぁ…あぁ…だ…だめ…」
「先輩…好きなんです。俺…本気なんです…」
熱く上擦った吐息が、一斗の首筋にかかる。
「俺は、先輩を手に入れたかった…たとえ、卑怯な手を使ってでも…」
「つ…つち…んっ…」
「先輩に憎まれてもいい…それでも、先輩が欲しかった」
興奮しているのか、土屋の息も荒い。
「お願いです…俺の気持ち…わかって…」
首筋に歯を立てる。もどかしい気持ちがそうさせたのか。一斗は、痛みなのか快感なのか、既に判別できない状況にあった。
「っつ…ふっ…んんっ…」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「一斗…」

いきなりキスをされた。

近づく白浜の顔を、よけるでもなく受け入れる。

どうでもいいわけじゃない。ただ、何も考えられない。

頭に浮かぶのは、土屋の顔…。白浜と土屋が重なる。

涙を流しながら、白浜の甘いキスに応えた。

白浜の優しさが、土屋と重なる。

「一斗…俺はお前を泣かせたりしないから…俺のものになれよ」

首筋に落とされるキスに反応しながらも、一斗は首を横に振る。

甘く、息があがる。耳朶を噛まれ、ぴくんと反応しながらも、いやいやをして無言の抵抗を続ける。

「こんなにかわいく反応されちゃ…俺、とめられない」

白浜の手が、シャツのボタンを外しはじめる。

ズボンの前も、全開にされる一斗だったが、抵抗する動きは見せなかった。

「俺はいったん身を引いたし…お前達を見守るつもりだった…

でも、あんな泣き顔…見せられたら…」

白浜の唇が、直に一斗の肌を這う。

シャツの前がはだけ、肌が露になっていた。ズボンのチャックも下ろされ、下着だけがかろうじて秘所を隠す扇情的な光景だ。

「やめ…はっ…せんぱ…」

「こんなに感じやすくしたのも…アイツなんだろ？

俺は…アイツが憎い…こんな…」

一斗の胸の辺りを這っていた唇が、感じやすい粒をキリッと噛んだ。

「いぁっ…うぁ…あ…っ」

一斗の肌に、薄っすらと汗が滲んでいた。

「ん…んぁっ…はぁ…あ…」

「こんな…かわいい一斗を泣かせて…。身体だけは貰っとくなんて俺は…許せねぇ…」

白浜の手が、一斗のトランクスのふちにかかる。

「そんなんじゃ…アイツは…そんな…」

「じゃぁ、なんでお前がそんなに泣く？」

白浜は一斗のトランクスをずらすと、一斗の既に猛ったそれをつかみ出した。

「やめっ…俺には、土屋が…」

「泣かせるようなヤツと…なんでそこまで…」

白浜の舌が、ゆっくりと裏筋を這い登る。

ゾクゾクした快感が、一斗の背筋に走った。

心は抵抗しているのに、身体は流される…。

快楽をせがむように、腰を前に突き出してしまう。

「ひぁ…ああぁっ…あっ…んっ…」

ちゅぷちゅぷと音をたてて、白浜の口淫は続く。

執拗に舌を絡めて、一斗を巧みに追い上げた。

「俺の…に…なれ…」

「やっ…ああっ…めっ…」

口に咥えながらの白浜の声が、むずがゆいような振動を与え、一斗を煽る。

「なんで…」

「好き…だか…ら…っく」

息も絶え絶えに一斗が応える。

目の前に、赤いもやがかかったようで、意識もはっきりしない。

身体は快感に流される。